

GS フィリピン セブ 2024

学習目標

- ・ 貧困を助長するメカニズムの理解
- ・ コミュニティの安心・安全な暮らしの支援

HOP
理解する

1

STEP
実践する

2

JUMP
発展させる

3

事前学習

- ・ 動画を視聴し、セブ島の文化について学んだ
- ・ 日本と海外の文化や価値観の違い、貧困問題について学び、持続可能な社会実現に向けて模索した。
- ・ 現地の子ども達に対してどのようにアプローチが効果的か考えた。

HOP
理解する

1

活動内容

- ・ ゴミ山 ・ スラム街
- ・ 薬物更生施設 ・ 女子高 UP大学

コラムⅠ ゴミ山

都心から車で30分ほどの場所にゴミが沢山積まれているゴミ山といわれる場所があった。道沿いには、かばんや衣類、飲みかけのペットボトルなど様々な種類のゴミが積まれていた。

しかし、観察している内に、ビニール袋のゴミが一つもないことに気が付いた。聞くところによると、ゴミ山に住む人々の収入源はビニール袋を売って得る僅かなお金のみようだ。そのため、ゴミ山にあるほとんどのビニール袋が回収され、売れる部分の無いかばんや衣類が残されているようであった。

日本に住む我々からすれば、ゴミが山積みになって放置されている光景はもちろん、マスクを貫通するほどの凄まじい悪臭は、信じられないものであった。

コラムⅢ 薬物更生施設

ここには、麻薬中毒になってしまい働くことが難しい、家族と離れ更生を目指す、保護を求めてなど、様々な理由を持った人々が施設で生活していた。

部屋はそれぞれ男部屋と女部屋に分かれており、それぞれが施設に入所した順番で割り振られていた。また、複数人が生活する部屋とは別に独房や隔離部屋、VIPルーム等が設けられていた。独房へは施設が掲げるルールを破った際に罰として入れられる部屋として利用されており、窓も明かりもない二畳ほどの小部屋であった。また、隔離部屋では情緒が不安定になっていたり、他の入所者に迷惑をかけてしまう際にクールダウン用として利用されていた。

入所者は1日の流れが決められており、体操や自分が生活している部屋の掃除など役割分担を行い、自分の役割に責任もって活動できるように工夫されていた。

この施設の1番の目標は入所者の方が自分で自立して生活することであるため、1日の流れがきちんと組まれているようだ。施設で働くスタッフの中には、元入所者の方も居られ、「なぜまたここにスタッフとして帰ってきたのか」という質問に対し、「自分はこの施設で生活することで薬物を更生することができた。だから、この施設に感謝の気持ちを恩返しするためにここで働いている」と話してくれた。

コラムⅡ スラム街

スラム街では、ホームレスの人が道端で寝ていたり、殺伐とした雰囲気漂っていたりするのではないかと考えていた。しかし、実際に訪れてみると、コンクリートの建物内で暮らしている人、テントを建てて魚を販売している人、訪問者に声をかけたり、手を振る人、どこから来たのかと問いかけてくる子どもなどといった、非常にフレンドリーな印象を受けた。

しかし、よくよくその人々を観察すると、裸足で駆け回っていたり、ボロボロの服を着ていたり、髪がボサボサだったりという特徴を見ることができた。

また、偶然にも葬式の場面に遭遇することができた。一見するとパーティーを行っているかのような雰囲気の中で、親族が麻雀を行っていた。実はフィリピンでは、葬式の際は、亡くなった人楽しい雰囲気の中で最後の時間を過ごすようにと、大勢の人々を集めて天国に送るのだそう。とても貴重な場面を見ることができ、日本とのお葬式の違いにも触れることができた。

コラムⅣ 大学・女子高

SOM高校とUP大学の2つの学校へ訪問した。

SOM高校は、フィリピン全国の最も貧しい子どもたちの中から、様々な観点から精査されたごく僅かの選ばれた少女数名をシスターがスカウトし、高校に入学させるというシステムの女子高等学校である。

この高校は全寮制となっており、敷地内には食堂や体育館、図書館や教室などといった施設はもちろん、トレーニングルームやプログラミングの部屋などもある。日本の大学のように自分の好きな専攻を選ぶことができ、看護系や建設系などさまざまな専攻がある。学生によると、将来職につき自分で稼げるようになるために日々、専門的な勉強に励んでいるとの話を聞くことができた。

また、上の学年が下の学年の面倒を見るという伝統があるようで、1年生は上の学年から制服の作り方を教わり、次入学してくる学生の為に制服を作っているということもわかった。

UP大学では、関西国際大学の学生2、3人とUP大学の学生2、3人で一つのグループになり、授業体験として現地の学生と共にディスカッションを行った。お互いのことについてより深く知るために、言葉を探りながらコミュニケーションを取り、様々な話を行った。

グループワークで感じたこととして、フィリピンの人々は自分の考えしっかりと持っており、失敗を恐れず堂々発表していることに気がついた。

活動内容
・給食作り ・授業

給食作り

○課題

- ・順番を待つという概念がフィリピンにはない → どのように順番を待たせたらいいか
- ・高学年の子どもが遠慮してご飯を貰いに来ない → どのように工夫したら取りにくるか

○改善

・本当に列に並ばせるのは意味があるのか？日本は列に並ぶ習慣があるから自然と並んでいるが、フィリピンでは文化が違うため、必要なかどうかということ話し合い、子ども達に効率よくご飯を配るためには何をしたらいいのか等をみんなで考えた。結果として、課題にあがっていた遠慮している子ども達には学生がクラスをまわって呼びかけたり、クラスにご飯を届けたりしたため、1回目よりも多くの子ども達にご飯が行き渡った。

○気づき

- ・フィリピンの子供達は授業中だとしても給食作りのお手伝いをしてくれた。先生も叱らずに、むしろ手伝っていることに対して褒めていた。→日本人は見て見ぬふりをする。日本だと先生は子ども達を怒るだろう。この違いには何かあるのだろうと考えているのだが、まだまだ答えは出ない。
- ・給食の配膳をしているときに、子ども達の服装などを見ていた。すると、ピアスをつけていて服が綺麗なのに裸足の子、ぼろぼろのサンダルを履いている子どもや食器を家から持って来れず申し訳なさそうにしている子など、たくさんの子供がいた。
- ・文化の違いとして、スプーンを使わずに手で食べている子がいた。

《 各グループの授業内容 》

- A：野菜の栄養素
- B：瞬間冷却パックを作ろう
- C：手の洗い方

授業



授業風景はこちら➡

○課題

- ・現地の人々に親しみのある素材を使った実験や生活の手助けになるような内容の授業を行ったがそれは本当に、現地に適応した授業だったのだろうか。
- ・よくよく話を聞いてみると、現地の人々は熱中症にはなりにくいということがわかった。理由を深く調べることはできなかったが、暑かったら水を飲む、毎日シャワーを浴びるなどといった対策をしているようだ。
- ・このようなことは事前に収集した情報の中にはない、全く新しい情報であった。現地に行き、人々と話したからこそわかった発見である。
- ・このような発見をさらに深掘りできれば、より密度のある授業を行うことができたのだろうが、予定していた内容を展開していくのが精一杯であった。

○気づき

- ・授業で物事を教えてあげるという考えがそもそも間違っているのではないか。
- ・現地の子供達は学びに対しての姿勢が凄まじく、冷却パックを作る実験をした際のリアクションや発表の際の積極性、発問に対しての疑問など、「知ろう」とする気持ちが強いと感じた。
- ・日本の子供達に同じ授業を行っても、このような反応は得られないのでは無いだろうか。
- ・日本の子供達は、正解を言わなければならない、間違った答えを言うてしまうのが恥ずかしいという気持ちが強く、自分を上手く表現できなかったり、学びに対する衝撃が薄いのでは無いかと考える。

プログラムを通して
感じたこと

プログラムを通して得たもの

物事の表面をそのまま捉えるのではなく、深層まで理解することの大切さに気が付いた。

スラム街や地図にない山の上の集落など、貧困層と呼ばれる地域に住む人々でも、スマホやバイクを持っていたり、レンタルWiFiがあったり、10:00頃にはおやつを食べるなど、本当に貧困層の人々なのだろうかと感じる部分があった。しかし注意深く見ると、服が擦り切れてボロボロ、裸足のままであったり、毎日ご飯を食べられていない、学校にも行けない、行けたとしても授業以外の時間は全て家事、育児といった子ども達が多く見られた。中には、裕福な家庭の子ども達も居り、経済的な格差を感じる部分もあった。

そんな状態であっても、フィリピンの子供達は日本の子供達と比べて、圧倒的にイキイキとしているように感じられた。これは、授業内での発表の際に強く感じる事ができ、積極的に発表する姿勢は、日々のコミュニケーションからなる信頼や失敗したからといって孤立することはないというような安心感からなるものではないかと考えられる。そうしたイキイキとした雰囲気こそが真の豊かさ・幸せなのではないだろうか。

日本では、豊か・幸せとは一般的に、物資に溢れていることや財産が潤沢であることが挙げられるが、実際にはそういうことでは無いのではないだろうか。フィリピンで暮らす人々にとっての豊か・幸せとは、横の繋がりと情の深さといった人同士の深い関わり合いや、一緒になって考える、汗を流して協働するといったコミュニケーションの充実、つまり、相手を信頼して支え合うことであると考えます。

損得ではなく、相手のことを我がことのように想うこと、例えば、村のことを一緒になって真剣に考える、教えるだけでなく教えられる関係性といった、「何かあったら助けて貰える」「一緒になって考えてくれる」というような感情こそが信頼感であり、そうやって向き合ったからこそ、村の人々にあんなにも受け入れて貰えたのではないだろうか。

プログラムを通して、自分との違いの中で相手を信頼し、コミュニケーションを積み重ねながら協働してきたこの1ヶ月は”豊か”であったと言えるのではないだろうか。

では、日本でこのプログラムと同じように他者と関わったとして、同じような豊かさを感じることはできるのだろうか。きっと難しいだろうと考える。この違いはやはり、他者との関わり方の薄さが原因ではなかろうか。機械化、情報社会化した日本では他者との協働なく目標を達成することができる他、都市化による人間関係の希薄化も問題となっている。つまり、コミュニケーションの機会が大幅に減少しているのである。

このような希薄化した社会から、我々だけでなく、次世代の人々が真の豊かさを得るためにはどのような関わりが必要なのだろうか。これらが我々にとっての新たな課題である。